

令和4年度(2022年度) 第3回とよなか都市創造研究所運営委員会 議事要旨

日 時 : 令和5年(2023年)1月24日(火) 18時00分~19時45分
傍聴会場 : 人権平和センター豊中3階
出席委員 : 石川委員、草郷委員、肥塚委員(委員長)、宗野委員(副委員長)、井加田委員
事務局 : 榎本、森田、石村、松田、比嘉
傍 聴 : 0人
備 考 : 会議はオンライン形式で実施した。

○開会

○案件(1)

令和4年度(2022年度)調査研究について(報告)

資料:資料1「令和4年度(2022年度)調査研究について(要約)」

≫「豊中市における地域づくりと健康づくりに関する調査研究」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員:名張市は地域自治組織の先駆的な市だが、その仕組みと今回着目している社会的処方との関係性は何か。
- ・事務局:社会的処方は、社会的つながりの乏しさが健康にネガティブな影響を与えるという考え方を前提にしたい。名張市では、まちの保健室という身近なところに福祉や医療の専門的人材を配置し、住民と密接につながれる体制を作っている。また地域自治組織を中心とした共助の取組みが地域のつながりを促進している。これらが健康にもポジティブな影響を与えていると推測される。
- ・委員:エリアディレクターは自治体職員が担うと考えられるが、かなりの負担ではないか。
- ・事務局:今回の調査では、エリアディレクターの仕組みは整理できたが、実際の働きぶりや、どんな課題や困難さがあるか、までは踏み込めなかった。
- ・委員:制度の狭間とはどのようなものか、具体例を教えてください。
- ・事務局:例えば、介護と引きこもり、ヤングケアラーなど、一家庭内で複合的な問題がある場合、介護の側面からアプローチすると引きこもりやヤングケアラーの問題が取りこぼれてしまう、などの例があげられる。
- ・委員:制度の狭間には、分野の狭間だけでなく、年齢による狭間もある。障害児が成長

して成人になっていくと、支援を担当する部署が変わり、支援が途切れて連続性がない、ということがある。そういう時間軸の狭間もある。

- ・委員：社会的処方という新しい枠組みを構築するときの課題、分野横断を阻む壁は何か。
- ・事務局：庁内セミナーで出てきた課題は、例えば、法律や制度の縛りがある中で自分の役割から外れる行動が難しい、外れれば問題が起こった時に守ってもらえなくなるというもの。また、部署間で目標が異なることがあれば、すり合わせが難しい。そういった中で、結局は前例踏襲となって連携が難しい、などがある。
- ・委員：部署の間には、目標の違いだけでなく、個人情報共有することの難しさもあるのではないか。
- ・委員：社会福祉の現場では重層的支援という言い方をしているが、社会的処方という言葉はどう位置づけられるのか。
- ・事務局：福祉領域で言われている重層的支援や地域共生社会という概念と社会的処方は重なる部分が多い。社会的処方という考え方をいうメリットは、医療の観点から出てきた言葉なので、医者に届きやすい点がある。また社会的処方は社会的なつながりの乏しさが健康にネガティブな影響を与えるというエビデンスに基づく考え方である。これらの点については報告書で詳説する。
- ・委員：豊中市社会福祉協議会が進めている取組みは社会的処方の中でどう扱われるのか。また、自治体はリンクワーカーを強調しているが、どうやって地域に合わせて育てるのか、という提言もあれば教えてほしい。
- ・事務局：社会的処方と社会福祉協議会の取組みとの関係はまだ整理できていない。ただ、リンクワーカーはコミュニティソーシャルワーカーとほぼ重なるので、リンクワーカーの養成は社会福祉協議会に学ぶところも多いと思う。これらも報告書で言及していく。

≫ 「豊中市における孤独・孤立に関する調査研究」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員：アンケート結果では、50歳代では孤独・孤立感が高いが、60～80歳代は低くなっている。一般的に高齢になった方が孤独感が高いと思われがちだが、反対の結果になっている。豊中市の高齢者が地域とつながっていると読めるし、現在の高齢者施策がうまくいっているとみえる。注目してほしい。
- ・委員：孤独・孤立と世帯収入には明確な相関はないと報告しているが、世帯の人数によって一人当たりの所得は変わってくるので、総収入だけではわからない。また、

仕事の分類も、今の分類では特徴が見えにくいですが、正規・非正規などグループ分けして比較してみると違った結果が見えてくるかもしれない。

- ・委員：孤独と孤立を研究の中でどこまで区別しているのか。区別するのであれば、はっきりと分かりやすく書くほうが良い。
- ・事務局：今回は孤独と孤立を分けて考えようというスタンスで調査している。報告書では、二つの違いを詳しく記述する。

≫ 「豊中市における健康データの利活用に関する調査研究」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員：データ統合を自治体に導入する際のコストはどうか。先進事例などあれば教えてほしい。
- ・事務局：多くの自治体では、専門的な分野は支援事業者や大学と共同で行っているが、コストまでは把握できていない。報告書では、できる範囲で言及したい。なお、豊中市の今回の調査研究については、データ規模が大きくなかったため、職員で出来る範囲で統合し、コストをかけずに実施している。
- ・委員：ここで扱っているデータは1箇年のものか、経年データか。
- ・事務局：国民健康保険データベースからとったデータについては、年の表示がないものは令和3年のもの、経年データがあるものはその年を表示している。豊中市の被保護者については、令和元年から令和3年の間に一度でも保護を受けた人を対象とし、経年で分析できるようにデータを作った。
- ・委員：データを基に施策を決めるのは重要だが、数値に振り回されて拙速に制度を変えていくのは好ましくない。中長期的な観点からみるデータ、短い期間でみるデータなど、データを活用方法についても整理してほしい。
- ・事務局：いただいたご意見を参考にして報告書をまとめる。
- ・委員：この研究は、データから課題を洗い出し、それを施策に落とし込んでいく、その過程を職員と一緒にやっていくことが大事と思う。数字をどう読み、どう分析し、どう説明するのか、ということを経験者だけでなく職員も関わってほしい。
- ・事務局：今回は、福祉部局の方からこういう課題があるから研究してほしいと依頼があって共同研究が始まった。福祉の職員も積極的に取り組み、問題意識もあったので、何をやるかが明確に進めやすかった。データも相手からこれを分析してほしいと提供された。研究してもらおうという姿勢ではなく、当事者意識をもってお互いに

フラットな関係で臨めたのがよかった。今後も、テーマは変わってもこのような共同研究を実施したい。

○案件（2）令和4年度（2022年度）とよなか地域創生塾について（報告）

資料：資料2「令和4年度（2022年度）とよなか地域創生塾」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。

- ・委員：事業を移管するということが、企画は市民協働部、運営はとよなか都市創造研究所という認識でよいか。
- ・事務局：すべてを市民協働部に移管し、市民協働部が企画から実施まで行う。委託する事業者も一から選定することになる。

○案件（3）令和5年度（2023年度）事業計画（案）について

資料：資料3「令和5年度（2023年度）事業計画（案）」

資料：資料4「とよなか都市創造研究所運営委員会の見直しについて」

事務局から資料に基づき説明があった。説明内容は略。以下、意見をまとめる。

- ・委員長：令和5年度の事業計画及び運営委員会を見直してアドバイザー制度を創設する旨の説明があった。ご意見ご質問があれば発言いただきたい。
- ・委員：運営委員会の市民委員は、市民の意見を研究に取り入れるという意義があった。運営委員会を廃止して報告会のみになった場合、報告会に市民はどのくらい参加するのか。報告会で市民が意見を出すことはあるのか。任期1年程度の市民アドバイザー制度などを検討してはどうか。
- ・事務局：これまで報告会に市民の参加は少なかったが、次回の報告会は内容のリニューアルを検討しており、そこでの市民の集まり具合やアンケート結果などから、今後の報告会の方向性を考える。市民の意見をいただくことは大事なことと認識している。
- ・委員：アドバイザーのイメージがわからないが、庁内から来た課題を研究所がアドバイザーに振り分けて解決してもらおうという仕組みなのか。
- ・事務局：アドバイザーの役割は2つ考えていて、1つは今の審議会のように、研究所の調査研究について助言をもらうというもの。もう1つは、AIや医療といった今の研究員では対応できない個別の課題に対して、専門家をアドバイザーとして依頼するもの。この場合の依頼は、年単位ではなく、個別の課題毎となる。

- ・委員：課題ごとに専門家を選んで、その都度依頼するというより、あらかじめ色々な分野の人たちをリストアップして、そこから選定して依頼した方が合理的ではないか。研究員の調査研究については別にアドバイザーを依頼する。どちらも同じアドバイザーというより、別の制度にしたほうがわかりやすい。
- ・事務局：庁内では、相談できる専門家をどのように見つければいいかが課題になっていて、その解決策として研究所に依頼するという経緯がある。いただいたご意見のようにリストを作ることも考えられるが、来年度からは調査研究アドバイザー制度を始めて、課題など改善点があればよい方向を探っていく。
- ・委員長：委員のみなさんからさまざまなご意見やアドバイスをいただくことができたように思います。事務局は、今回のご意見を整理して、事業計画をまとめてください。

○案件（４）その他

≫事務連絡

- ・令和４年度研究所機関誌「とよなか都市創造」の発行は３月末を予定。

○閉会